

使徒の働き6章「食卓に仕えた御霊の人」

1A 食卓に仕える人々 1-7

1B ギリシア語を使うユダヤ人 1

2B 御霊と知恵の満ちた七人 2-6

3B みことばの広がり 7

2A 知恵に満ちたステパノ 8-15

1B 地方から来ているユダヤ人との議論 8-10

2B 偽証によるそそのかし 11-15

本文

使徒の働き 6 章です。私たちは、5 章において、使徒たちが捕らえられても、御使いが助けて、牢から出て来て、福音を宣べ伝え続けました。ついに、パリサイ派で尊敬されているガマリエルが、「放っておきなさい。その計画が人からのものだったら自滅する。神からのものだったら、彼らを滅ぼすことができない。」と意見して、それに最高法院は従いました。使徒たちは、イエスの名のゆえに自分たちが辱めを受けたことを喜び、毎日、宮や家々でイエスが救世主、キリストであることを宣べ伝え、また教えたとあります。

しかし、このようにして教会が成長するにつれて、内部で問題が起こります。前回、アナニアとサッピラが偽善の罪を犯し、倒れました。ここ 6 章では、分裂という危機があります。しかし、この問題について正しく神に応答さえすれば、そのことによってかえって教会が強められるきっかけになります。そして 6 章は、ここで起こった変化によって、後々、異邦人宣教へとつながる、架け橋ともいべき大切な章です。

1A 食卓に仕える人々 1-7

1B ギリシア語を使うユダヤ人 1

¹ そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。

「弟子」とありますが、これはキリストを主、師とする弟子たちのことです。イエスはよみがえられた後に、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。(マタ 28:19)」と命じておられましたが、主と共に生き、主から学び、自分を捨てて従っていく人々のことであります。私たちも、弟子になるように召されています。

そして、「ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た」とルカが書いています。けれども、分裂の危機によってかえって教会が強められる機会ともなると言いましたが、この不満を神は大いに用いられることになります。

ユダヤ人と言っても、当時、異なる文化と言語の中に生きている人々がいました。ギリシア語を第一言語に使うユダヤ人です。ヘレニストのユダヤ人とも呼ばれます。時は、さかのぼって紀元前四世紀に、マケドニアの王であったアレクサンドロスが、当時の世界を支配していたペルシアと戦い、初めて西洋の国が世界を支配するようになりました。彼がギリシアの言語と文化を、征服した地域一帯に広めることになったのです。それをヘレニズムと言います。この時に、ギリシア語、ギリシア文化、ギリシア思想はその後の世界に決定的な影響を与えます。ローマが、紀元前一世紀にギリシアを倒し、世界帝国となりますが、ローマにはラテン語という公用言語があったのです。ところが、それはあまり普及せず、一般の民衆はギリシア語を使い続けました。ですから、新約聖書はギリシア語で書かれています。

ユダヤ人も、その影響を大きく受けます。北イスラエル王国はアッシリアによって滅ぼされ、南ユダ王国はバビロンによって滅ぼされ、それぞれ捕え移されました。そこから離散の歴史がユダヤ人に始まります。彼らはそれぞれの地に定着し、経済においても繁栄し、社会的にも認められてくようになります。今のトルコにある、アンティオキアの町は当時、住民の一割はユダヤ人であったと、そこを訪れた時に説明を受けました。驚くべき数ですね。そういった彼らは、ギリシア語によって、ユダヤ教の会堂シナゴグで礼拝を守っていました。そして、離散の地からエルサレムに帰還した人たちがいます。彼らが、ここに出てくる、「ギリシア語を使うユダヤ人」です。

そして、イスラエルの地を離れず、ギリシアのアンティオコス・エピファネスによる大迫害にも耐え、伝統を守ってきたユダヤ人を、ヘブライストと言います。「ヘブル語を使うユダヤ人たち」です。エルサレムにおいては、ヘブル語を話すユダヤ人たちのほうが主流でした。そこで、やもめに対する配給において、いつの間にか、ヘブル語を話すユダヤ人のやもめに配給が行き、ギリシア語を話すユダヤ人のやもめは、なおざりにされていったという問題が起こったのです。

このような亀裂や分裂が、教会をどれほど痛めるかはご存じだと思います。イエスの祈りに、「すべての人を一つにしてください。(ヨハ 17:21)」とありますし、使徒パウロは、「あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。(I コリ 12:27)」と言って、一つであることが教会の姿だからです。

2B 御霊と知恵の満ちた七人 2-6

² そこで、十二人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。³ そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に

満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、⁴ 私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」

使徒の十二人が、「全員」を呼び集めています。これは教会全体の問題です。彼らが初めに語ったのは、「**私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。**」であります。これまで、彼らが神のことばを語ることに専念していたことを思い出してください。不思議としるしを行いました、それはあくまでも、語る神の言葉の確かさを証明するものであり、本望は神のことばを語ることです。

ここで大事なことは、使徒たちがみことばを語ることを、食卓のことで仕えることよりも優れている、ということをお話しているのではないことです。私がこのようにみことばを取り次いでいますが、礼拝がすべて終わった後に、椅子を片付け、また、掃除をする人もいます。これらのことが、みことばよりも劣っているということでは決してありません。ヨハネ伝でイエスは、食事の席で弟子たちの足を洗い始めました。そこで、「13:14 **主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。**」と言われました。つまり、仕え合いなさいと言われているのです。

そうではなく、使徒たちに与えられている召しであります。それぞれに召しが与えられ、賜物が与えられ、使徒たちは神のことばを取り次ぐということを主から命じられていたのです。どんなことよりも、主のことばを語り継ぐことが命じられているので、彼らにとって、神のことばを後回しにしてはいけない、と言っています。

そこで、かつて旧約の時代に、モーセに舅ヤイロが助言したのと同じことを使徒たちは語ります。「**御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たち**」を選ぶことです。モーセが、イスラエルの民の間で起こった問題に対して、さばきを行っていたのですが、ヤイロが、それを一人ではできないと戒め、そして、「**出エ 18:21 民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として民の上に立てなさい。**」と言いました。今、同じように他の人たちに食卓のことを任せるのです。

資格が、「**御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たち**」ということですが、御霊については、使徒の働きの中で特徴となっています。パウロが書きました。「ガラ 5:22-23 **しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。**」食卓に仕えるといっても、それが出来ればよいのでは決してありません。こうした御霊の満たしがあってこそ、奉仕です。また、教会において、すべてが主に対するものです。賛美と説教だけが主に対するものではありません。誰もができそうな雑事が、その小さいことに見えるものが、主に対するものであり、御霊の満たしが必要です。

そして、「**知恵に満ちた**」とあります。知恵とは、神の思いや心を、具体的なことにおいて、どのように実践すればよいかを教えるものといってよいでしょう。旧約聖書では、幕屋の祭具を作る人が、知恵の御霊に満たされていた人でした。具体的なこと、食卓で仕えることをやっていくのですが、それを行った後で、そこに神の平和、聖さ、喜びなどが流れていることを見届けることができるような知恵です。

そして、「**評判の良い人たち**」です。これは、教会内だけでなく、教会外において非難されるところがない、という意味です。社会性を持っているということ。教会で指導的な働きをするにあたって、このことはとても大切になります。

先の「仕える」という言葉は、デアコネオ(διακονέω)と言い、ここから「執事」という働きが生まれます。ピリピ書の冒頭が、「**すべての聖徒、たちならびに監督たちと執事たちへ**」とあります。そして、テモテへの手紙 3 章に、執事の資格について書かれています。「**I テモ 3:8-10 同じように執事たちも、品位があり、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利を求めず、きよい良心をもって、信仰の奥義を保っている人でなければなりません。この人たちも、まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事として仕えさせなさい。**」

⁵ この提案を一同はみな喜んで受け入れた。そして彼らは、**信仰と聖霊に満ちた人ステパノ、およびピリポ、プロコロ、ニカノル、ティモン、パルメナ、そしてアンティオキアの改宗者ニコラオを選び、**

すばらしいですね、使徒たちの提案を「**一同はみな喜んで受け入れた**」とあります。この使徒たちの提案自体が、知恵の言葉であります。分裂する危機において、相対する意見を持つ人々が対立することなく、みな喜んで受け入れることのできる、二つを一つにする平和の言葉です。

それから七人を選びますが、その特徴が「**信仰と聖霊に満ちた人**」であります。使徒の働きの学びで何度となくお話ししていますが、聖霊を受けるには信仰がないといけません。神がおられる、聖霊が臨んでくださると信じているということが大事です。そして、ここに書かれている名前はすべて、ヘレニストのユダヤ人、ギリシア系ユダヤ人です。これは賢いです。彼らがヘブル語を話すユダヤ人から公正な扱いを受けていないと感じていたので、敢えてギリシア語を話すユダヤ人を食卓に仕えるように選んだのです。

この中で前に出てくる二人が、後に神のご計画の中で大きな働きをします。ステパノは、これから出てきます。次回、7 章で彼が御言葉を語り、それで殉教します。8 章では、ピリポが伝道者としてサマリア人に福音を語ります。ステパノは殉教しますが、その殉教によってエルサレムに留まっていた弟子たちは散らされることになります。そして、散らされたところで、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも福音を語り始めるのです。また、殉教の場にはパウロがいました。その彼が後に、異邦

人への使徒となっていきます。そして、ピリポはユダヤ人だけでなく、サマリア人に語り始めます。

イエスが、「1:8b そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てにまで、わたしの証人となります。」と言われたことが、やもめに対する配給についての問題から、実現していくのです。主は、すべてのことを相働かせて、益としてくださる方です。

そして興味深い人物が最後にいます。「アンティオキアの改宗者ニコラオ」であります。改宗者ということは、民族的にはユダヤ人ではなく異邦人です。改宗してユダヤ教徒になりました。さらに、アンティオキア出身だということです。アンティオキアが、後にパウロとバルナバを小アジアとギリシアに遣わしてく中心的な教会となっていきます。この彼が、七人の執事の中にいたのです。

ヘレニストのユダヤ人や、改宗者が、このような形で用いられていきます。ユダヤ人以外の他の民族、他の文化に生きる人々に福音を宣べ伝えるにあたって、どちらの文化や言語も知っている人々を神は用いられて、それでイエスの福音宣教の命令を行っていくようになります。

ところで、二つ以上の文化を持っている人は、とかく疎外されていきます。日本に生まれ育ったのに、外国人の親だとかいう人々はそうです。疎外されていると感じている時、実は神の目からは、御国の働きをとぎれなく行っていく時に用いられる器になっていくのです。人の目にはマイナスでも、神の目には大いにプラスなのです。

⁶この人たちを使徒たちの前に立たせた。使徒たちは祈って、彼らの上に手を置いた。

使徒たちがこれまで行っていた、食卓に仕える権限を、祈って手を置くことによって委譲しました。旧約の時代から、手を置いて祈ることは主の働きを行う人々に対して行っていました。モーセが、祭司と会衆の前で、手を置いて次の指導者としてヨシュアを任命しました(民数 27:22-23)。そして、手を置いて祈る時に、牧者テモテの場合は、聖霊による賜物を受けています。「I テモ 4:14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません。」もしかしたら、ステパノとピリポには、この時に使徒たちにも与えられていた賜物が、彼らにも与えられたのかもしれませんが。それで、不思議としるしを行っていくようになります。

3B みことばの広がり 7

⁷こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った。

この問題を、主が解決してくださったことによって、なおのこと神のことばが広まっていきました。使徒たちが、主から命じられたこと、祈りとみことばに専念できたからでしょう。

弟子たちの数が非常に増えていき、ここですごいのは、「祭司たちが大勢、次々と信仰に入った」ということです。彼らこそが、これまで使徒たちを迫害する急先鋒にいました。神殿の敷地において、使徒たちの影響力を恐れて、また死者からの復活を使徒たちが宣べ伝えているので苛立ったのです。けれども、その彼らが次々と信仰に入っています。

けれども、祭司たちが信仰に入ったということは、ユダヤ人たちはこれまでにない脅威を抱くことになります。日本の環境で言うならば、地元で力をもっている神道の神主の一家の中で、クリスチャンになる人々が出てきた、であるとか。これまでは、外側で、サブカルチャーのようにして起こっているなどとして、客観的に眺めていた人々も、内部にまでそれが入ったら反発します。そのことが、ステパノの身に起こります。

2A 知恵に満ちたステパノ 8-15

1B 地方から来ているユダヤ人との議論 8-10

⁸ さて、ステパノは恵みと力に満ち、人々の間で大いなる不思議としるしを行っていた。

ステパノは、「恵みと力に満ち」ていました。力だけでなく、その前に恵みがあつたことです。私たち人間は力のある人が、あたかも優れているかのように見えますが、そうではなく、神の恵みによって選ばれて、神がその人に力を与えています。創世記 6 章 8 節には、「ノアは主の目に恵みを見出した」とあります。それで、大いなる洪水が起こる時に、箱舟に乗って救われるという、神の力が現れました。そして、恵みは、受けるに値しない人に神の力が臨むという、憐れみと愛があります。イエスが恵みとまことに満ちておられる方ですが、らい病人、遊女、病人、悪霊つきなどに触れていかれました。

そしてステパノ、後にピリポを見ますが、食卓に仕える奉仕をしていたのに、そこから御言葉を語る務めにも預かっています。主にあって忠実と認められた者には、主は多くのことを任せられます。「マタ 25:21 おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。」主に召される人は、主に仕えながら召されます。御言葉の働きに召されているからといって、食卓に仕えるなど、他のことをしないで待っている、ということではありません。例えば、清掃をしながら、御言葉の学びをしていたら、主が福音宣教者になるように召されます。事実、カルバリーチャペル・コスタメサでは、清掃員として働いていた人々が、後に遣わされて教会を始め、牧者となっている人々が多くいます。

⁹ ところが、リベルテンと呼ばれる会堂に属する人々、クレネ人、アレクサンドリア人、またキリキヤやアジアから来た人々が立ち上がって、ステパノと議論した。¹⁰ しかし、彼が語るときの知恵と御霊に対抗することはできなかった。

当時、エルサレムには 400 以上の会堂、シナゴークがあつたと言われます。それぞれの会堂に

特色があるのですが、「リベルテンと呼ばれる会堂」とは、「かつてはローマの奴隷であったが、今は自由民となったユダヤ人たち」を表しています。そのような会堂が、それぞれの出身地で集まっていた。クレネ人は、今のリビアです。アレクサンドリアは、今のエジプトです。そしてキリキアは、トルコの地中海に面した南の地方で、パウロの出身地方でもあります。そして、アジアですが、西トルコのエーゲ海に面する地方です。彼らの多くが、ヘレニストのユダヤ人でしょう。ステパノと同じ背景をもったユダヤ人たちです。それぞれから来た人々が、ステパノに議論をふっかけました。

そして、これまで食卓に仕える時に与えられていた「知恵」が、今、御霊によって、反対する人に使われるのです。そして、イエスが約束されていました。「ルカ 21:12-15 しかし、これらのことすべてが起こる前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。ですから、どう弁明するかは、あらかじめ考えない、と心に決めておきなさい。あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり反論したりできないことばと知恵を、わたしが与えるからです。」対抗したり、反論することのできない知恵です。

2B 偽証によるそそのかし 11-15

反論や対抗ができなければ、力で押し潰すしかありません。あるいは、中傷や偽証を使います。ここでユダヤ人たちは、人を使って偽りの証言をさせていきます。

¹¹ そこで、彼らはある人たちをそそのかして、「私たちは、彼がモーセと神を冒瀆することばを語るのを聞いた」と言わせた。¹² また、民衆と長老たちと律法学者たちを扇動し、ステパノを襲って捕らえ、最高法院に引いて行った。

ユダヤ人にとって、モーセが預言者であり、神の律法を受けて、与えた人です。ですから、モーセを冒瀆したということは、神の律法に違反することです。そして、神を冒瀆したことになります。そして、彼らは扇動しました。初めに、民衆から。そして民衆から彼らの代表である長老たちです。そして、律法に精通していると言われる律法学者たちです。これらの言葉を聞き、彼らもそそのかされ、最高法院、サンヘドリンにステパノを連れて行きました。

¹³ そして偽りの証人たちを立てて言わせた。「この人は、この聖なる所と律法に逆らうことばを語るのをやめません。¹⁴『あのナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」

ステパノが 7 章で御言葉を語ります。そこで彼は、主が手に造った家には住まわれないということ話をしました。ソロモンも献堂式の時に告白し、イザヤもこのことを預言しました。そして、彼らが聖霊に逆らっていて、律法を守っていないと糾弾します。もし神殿そのものの内に神を収め

られるならば、それは既に天地を造られた神ではなく偶像の神です。このことをステパノが議論の中でも語っていたのでしょう。それで、偽りの証言とは、「この聖なる所と律法に逆らうことばを語るのをやめません」ということなのです。聖所に逆らっているのではなく、聖所を偶像化していることを語っているのです。先に見たように、祭司たちがどんどん信じて行っただからです、そこで仕えている人々は、その問題を薄々分かっていたのです。悔い改める人たちもいれば、このように怒り狂って、中傷する人たちもいるのです。

そして、かつてイエスがカヤパの前で偽りの証言者が出てきて、神殿を壊そうとしているという不当な証言をされましたが(マタイ 26:61)、同じ文脈でステパノがイエスの言葉を引用したと告発されています。主が、宣教の初期に宮清めを行われました。最後の週に、エルサレムに入城された時に宮清めを行われたのとは別に、初期にも行ったことをヨハネは記しています。「ヨハ 2:17-21 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心が私を食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。18 すると、ユダヤ人たちがイエスに対して言った。「こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか。」19 イエスは彼らに答えられた。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」20 そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかった。あなたはそれを三日でよみがえらせるのか。」21 しかし、イエスはご自分のからだという神殿について語られたのであった。」このことも、ステパノは語っていたのでしょう。復活の事実です。

そして、「モーセが私たちに伝えた慣習を変える」ということも、訴えています。これはもちろん、歪曲である誇張でしょうが、ステパノは、キリストにあって律法が成就した。信じることによって、義と認められるという神の恵みも語った可能性があります。

¹⁵ 最高法院で席に着いていた人々が、みなステパノに目を注ぐと、彼の顔は御使いの顔のように見えた。

驚くことに、御使いの顔のように見えたとあります。彼らはモーセに違反することを教えていると訴えていましたが、当人は、モーセがかつて、主との語らいで顔が輝いたのと同じように、顔が輝いていたのでしょうか。主の栄光を反映した顔であったのでしょうか。

このようにして働きが、十二使徒だけでなく、食卓に仕えている人々に受け継がれていきます。そこにあったのは、御霊の満ち、信仰の満ち、知恵の満ち、恵みと力の満ちでした。御霊は、すべての人に注がれています。使徒たちが行っていたことを、他の弟子たちも行っています。こうやって、福音のことばは広がっていくのです。主は、小さな事柄に忠実な者たちから、より大きな責任を任せられます。どうか、このイエスの定められた原則の中に生きていきましょう。